

報告

大英博物館シンポジウム「マンガとは何なのか？」

スチュワート ロナルド

大英博物館「マンガ」展の関連イベントとして

2019年8月23日に大英博物館の大規模日本「マンガ」展 (The Citi exhibition Manga) (図1) に関連したイベントとして、「マンガとは何なのか? : 日本マンガと視覚ナラティブの考察」(What is Manga? Exploring Japanese Visual Narratives) と題したシンポジウムが、大英博物館近くにある大英図書館 (図2) のナレッジセンター (Knowledge Centre) で (10:00~17:30) 開催された。日本、北米およびヨーロッパからの学者とマンガ家 16 人が日本の漫画文化の様々な面について、約 100 人の聴衆を前に発表した。筆者も登壇者の一人として、北澤楽天と近代漫画の関係について発表を依頼され、招聘された。



図1 大英博物館入り口



図2 大英図書館

シンポジウムは大英図書館が協力し、イースト・アングリア大学のセインズベリー日本藝術研究所と国際交流基金とによる共催イベントで、大英博物館の「マンガ」展 (5月23日~8月26日) の終了に合わせて開催された。展示会は、日本と英国の間で2017年に合意された「日英文化年間 (Japan-UK

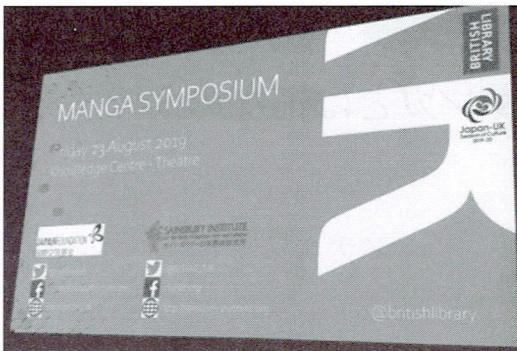


図3 オープニング

(The Art of Manga)はマンガをどのように描き、作り、読むのか、「過去からの継続」(Drawing on the Past)はマンガの歴史、「皆のためのマンガ」(A Manga for Everyone)はジャンルの幅広さの紹介、「マンガの力」(Power of Manga)はマンガの人を動かす力、「線の力」(Power of Line)はどのように物語が線で形成されたのか、

「際限のないマンガ」(Manga: No Limits)は紙媒体を超えるマンガ表現、であった。シンポジウムでは、展示会で取り上げられたこれらのテーマを基に、さらに視野を広げようとしていた。

シンポジウムの目的は、日本と海外からのマンガ・コミックス学者およびマンガ家が、基本的な定義、マンガの広がりや影響について話し合う、国境を超える対話の場となることであった。最初の挨拶と基調講演の後、シンポジウムは3つのパネル、漫画の表現、漫画の歴史および博物館と漫画に分けられた。最後は発表者によるラウンドテーブルであった。司会者はセインズベリー日本藝術研究所のユーヅニア・ボグダノフ・クンマー講師であった(図4)。ストックホルム大学教授のジャクリーヌ・

Season of Culture) 2019-20) という両国間の特別文化交流期の最初のイベントとなった。大英博物館のコレクションと原画を中心とした「マンガ」展は、6つテーマを別々のゾーンで探る構成であった。各ゾーンは以下の通りである。「マンガの芸術」



図4 会場と司会者ボグダノフ・クンマー氏
(写真提供: Japan Foundation, London)



図5 ジャクリーヌ・ベルント氏

ベルント氏による基調講演は刺激的な内容であった(図5)。ベルント教授はマンガ研究という学際的な分野の諸問題を取り上げ、「マンガ的」な表現についての研究の中に、メディウム・スペシフィシティ(素材や媒体に固有の性質)の面が十分注目されていない、そしてシンポジウムの題名の「マンガとは何なのか?」という問いは、答えられないほどマンガは多様すぎて、定義が不可能だと論じた。さらに、新興のジャンルや傾向(「おばあちゃんマンガ」など)の例を通じてマンガ研究の新しい課題も提起された。

パネル1. マンガ・コミックス理論と表現論

マンガ評論家の、伊藤剛氏（東京工芸大学教授）と夏目房之介氏（漫画家で学習院大学教授）は「マンガの表現（記号）」と題した発表で、紙と筆を使いながら、マンガに使用されたコマや線による効果の例を描いて説明した（図6）。次に、漫画家の竹宮恵子氏（京都精華大学元学長と日本マンガ学会の会長）とマンガ研究者のヤマダトモコ氏（明治大学米沢嘉博記念図書館）が少女マンガについて発表した。ヤマダ氏が少女マンガの画期的な時期、1970年代の始まりにおけるマンガの描き方の変遷の好

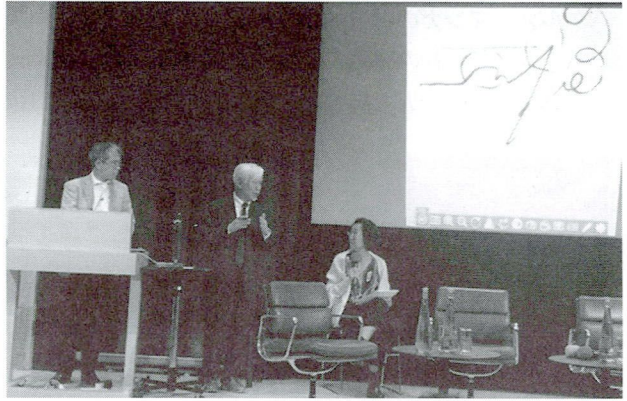


図6 伊藤剛氏と夏目房之介氏

例を示し、竹宮氏がその時代の背景を自分の経験から話した（図7）。そして、このパネルの最後の発表は京都精華大学マンガ学部教授、吉村和真氏の「マンガのリテラシー：この史代のマンガ『キガタウン』にある「漫符」をケーススタディとして」と題した報告であった。日本では誰がマンガを読むのか、何歳から読むのか、どのようにマンガの読解力が養われているのか、調査結果を説明した。その後、吉村氏は、『夕風の街 桜の国』および『この世界の片隅に』などのマンガ作品で、複数の賞を受賞してきたマンガ家、この史代氏（比治山大学美術科客員教授）の新作における「漫符」、マンガ

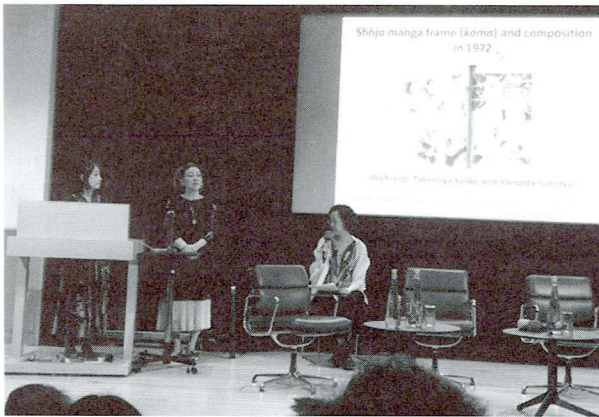


図7 ヤマダトモコ氏と竹宮恵子氏

を読むために理解しなければならないマンガの特殊な視覚的言語（シンボル）をいくつか取り上げて紹介した。

この史代の『キガタウン』に紹介されている「漫符」は、「マンガ」展の最初のセクション「マンガの芸術」にも紹介されていた。展示会に入る前に、イギリス人にとって馴染みのあるウサギのキャラクター、ジョン・テニエルが19世紀にルイス・キャロルの児童文学『不思議の国のアリス』のために描いた挿絵が、日本マンガという不思議な世界へ来館者を誘う。入り口に入るとこのキャラクターは、『キガタウン』の主人公、鳥獣戯画からインスパイアされたウサギのキャラクター、ミミちゃんに変化し、ミミちゃんは展示会の中で案内役を果たし、展示会全体のモチーフになっていた。シンポジウムの

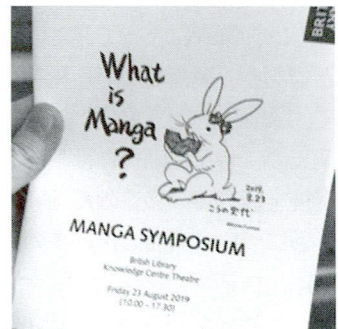
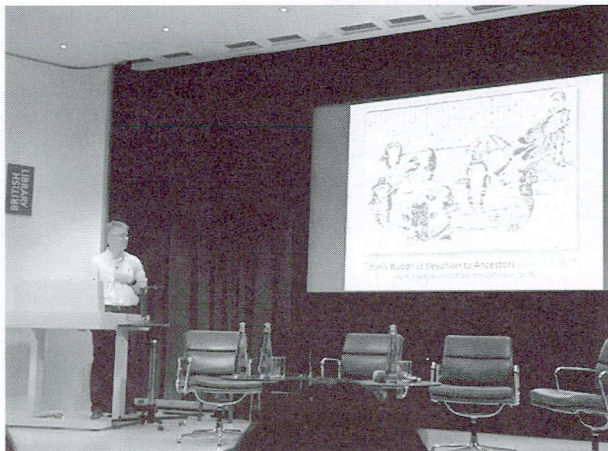


図7 シンポジウムのプログラム

プログラムの表紙にも登場している（図8）。

パネル2. マングの歴史的なルーツ

パネル2の最初の発表者はセインズベリー日本藝術研究所の研究フェローと大英博物館「マンガ展」キュレーターの一人であった松葉涼子氏であった。松葉氏は江戸時代の絵本（黄表紙など）という、



筆者図8 と 1870 年代のポンチ絵
(写真提供：小野塚佳代氏)

絵と文字からなった大衆向け物語を出版した版元と、明治期から昭和初期に続いたポンチ本の出版社のつながりを論じた。その次に、筆者が日本マンガ史、「ポンチ絵」から「マンガ」への変遷における北澤楽天の位置について発表した（図8）。楽天は現在、あまり広く知られていないが、映画「漫画誕生」の公開予定、書籍『北沢楽天：日本の初めての漫画家』の出版、そして大英博物館のマンガ展にも比較的大きく取り上げられたことで、今年にわかに注目されるようになったことを紹介し、現代の日本漫画の発展に大きな役割を果たしたことを論じた。発表の中で、筆者が最近見つ

けた史料を初めて公開した。一つは楽天がマンガを描く最初のきっかけとなった『小国民』とアメリカの『パック』雑誌とのつながりであった。もう一つは、バンベルク州立図書館に所蔵されている 1892

年から 1900 年までの週間『ボックス・オブ・キュリオス』新聞から、楽天に西洋風カリカチュアを教えたフランク・A・ナンキベルの漫画、そして楽天のデビュー政治漫画および複数コマの漫画と風俗画を紹介した。この史料は 2001 年頃からずっと探してきたもので、この史料を見せることができたことは、筆者にとって非常に嬉しいことであり、興奮しながら見せた。そして、「漫画」という言葉の普及における楽天の「時事漫画」の役割、また戦前戦後を通じての多くの漫画家への楽天の影響についても話した。このパネルの最後に、ウィスコンシン大学マディソン校教授のアダム・L・カーン氏が討論者として登壇し、松葉氏と筆者の話をまとめ、漫画史における新たな問題提起をされた。



図9 北澤楽天の『ボックス・オブ・キュリオス』作品を紹介している筆者（写真提供：Japan Foundation, London）

パネル3. 博物館の中のマンガ

このパネルは京都国際マンガミュージアム研究員の伊藤遊氏とユー・スギョン氏の「日本のミュージアムにおけるマンガ」をテーマにした発表で始まった。伊藤は日本におけるマンガ展示会について話した。日本全国で展示会が開催され、2018年の一年間だけで400以上あったが、その大半は出版社などの企業によるバックとして提供されている。わずか一部だけが専属キュレーターによる、特定のテーマを探るものだと話し、京都国際マンガミュージアムの例を紹介した。ユーは京都国際マンガミュージアムでのマンガや他の史料収集と保存プロセスについて説明した。次の発表者はハンブルク美術工芸博物館のキュレーターであるサイモン・クリングラー氏であった。

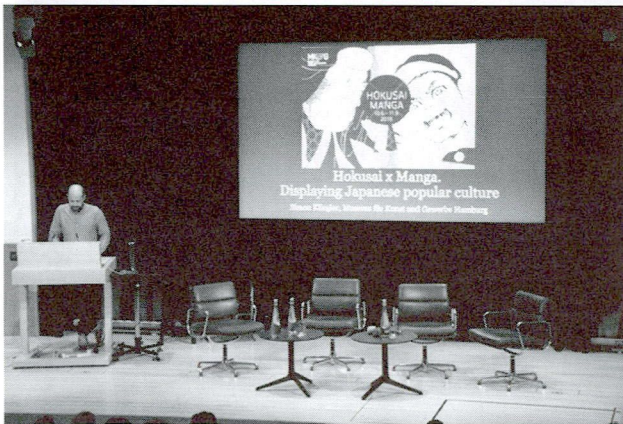


図10 ハンブルク美術工芸博物館のクリングラー氏
(写真提供: Japan Foundation, London)

ヨーロッパの最も古い公立博物館の一つ、1874年に設立されたハンブルク美術工芸博物館は、1680年から現在まで日本庶民が楽しんできた視覚文化として、浮世絵からマンガまでの展示会「北斎×マンガ」展を開催した(図10)。その企画展のキュレーターの一人であったクリングラー氏がその展示会で試みた展示方法、工夫(展示会の中身を紹介するオリジナルなアニメーションの依頼など)や問題について話した。その次の発表者は、大英博物館

「マンガ展」キュレーター、セインズベリー日本藝術研究所研究担当所長、ニコル・クーリッジ・ルマニエール氏で、「大英博物館における漫画」と題した発表をした(図11)。クーリッジ・ルマニエール氏によると、大英博物館の日本漫画のコレクションは数十年前に始まり、近年、彼女がキュレーターになってからは、マンガの原画のコレクション等の二つの規模の小さなマンガ展が、更に拡大されたと言う。今回の展示会の狙い、そして計画にあたって直面した様々な問題(構造、展示スペースの使い方、著作権、出版社と漫画家の要求など)について話した。



図11 大英博物館のクーリッジ・ルマニエール氏

大英博物館にとって今回の展示会は大成功であった。博物館の調査によると、来場者の平均年齢は33.5歳、普段の来場者の平均年齢44.5歳を大きく下げた。来場者45%は初来館者、そして20%は16歳以下であった。混雑しないように毎日の入場者が2000人に制限されても、約3ヶ月間で18万人以

上の来場者があった。大英博物館にとっては新記録であり、日本のマンガ文化の人気の高さを物語る数字であった。パネルの最後には、ロンドン芸術大学のコミックス研究者、イアン・ハーグがパネル3の発表に対してまとめてコメントされた。

ラウンドテーブル

シンポジウムが終了前に、コミックス研究で広く知られているロンドン芸術大学教授のロジャー・セイビン氏がラウンドテーブルの司会者となって、クーリッジ・ルマニエール氏、クリングラー氏、伊藤遊氏、ユー氏、そして筆者が「クール・ジャパン」と将来について意見を交わした（図12）。残念ながら、ラウンドテーブルが盛り上がりかけた時に終了時間となってしまった。しかし、全体的に有意義なシンポジウムとなった。



図12 ラウンドテーブル
(写真提供：アダム・L・カーン氏)

シンポジウム後

シンポジウムは大英博物館と同様に、「日英文化年間2019-20」のイベントの一つとして計画されたが、他の日本マンガに注目した関連イベントも開催された。シンポジウム後、筆者と他の登壇者はそれらのイベントに招待された。シンポジウムの翌日（24日）の午前中、キュレーターであったルマニエール氏が私たちを展示会に案内してくれ、午後にはスウェーデンボルグ協会での、ヤマダトモコ氏による少女マンガの歴史についての講演にも出席した。25日にはロンドンのフォイルズ書店でのイベントにも招待され出席した。ファンで溢れんばかりとなったイベント会場では、竹宮恵子氏がイギリスのコミックス歴史家ポール・グラヴェットのインタビューを通じて、2時間近くも自分のキャリアを振り返った。この直後、筆者はロンドンを後にした。「マンガ学」の発展、日本のマンガ文化の国境を超える力、そしてマンガを通じての文化交流の可能性を深く感じさせられた数日間のロンドン滞在であった。

British Museum Symposium ‘What is Manga?’

STEWART, Ronald

This is a report on the ‘What is Manga? Exploring Japanese Visual Narratives’ held on 23 August 2019 at the British Library in conjunction with the British Museum’s ‘The Citi exhibition Manga.’ It brought together 16 manga practitioners and researchers in different fields from Japan, Europe, the UK and North America to present research and create a border crossing dialogue on aspects of manga raised in the exhibition, on basic definitions, and on Japanese manga’s global reach and influence.